

『大鏡』の学芸人 ―その描写方法― 『三一①』藤原行成

広瀬裕美子 1.

1. 一般科文系

『大鏡』では、道長に至る藤原北家嫡流の人物に共通して「たましひ」ある豪胆な逸話が、対して藤原良房・仲平・実頼・伊尹・道隆の一族は、学芸色豊かな逸話が描かれている。旧稿^{〔註〕}では『古今』にもあまた侍めるは「良房伝」と記されている藤原良房について、そして、「和歌の道にも傑れおはしまして、後撰にもあまた入りたまへり」(実頼伝)と記されている藤原実頼について論じたが、本稿では「和歌のかたやすこしをくれたまへりけん」(伊尹伝)と記されている藤原行成に注目し、同じ三蹟の一人として有名な藤原佐理と比較しながらその描写について検討してみたい。(ただし、今回は紙面の関係上、藤原行成について掲載し、藤原佐理については次稿で論じるものとする。)

キーワード… 中古文学、歴史物語、藤原行成

一 藤原行成

藤原行成は、天禄三(九七二)年、父右近衛少将義孝と母源保光女の子として誕生。父義孝は一条摂政伊尹と恵子女王(代明親女王、醍醐天皇の孫にあたる)との子である。義孝は、兄弟に挙賢・義懐、姉に懐子があり、懐子は冷泉天皇の女御で東宮師貞親王(後の花山天皇)の母であった為、今を時めく華やかな一族であった。行成の母である源保光女の父保光も恵子女王と同じ代明親王の子である。行成の外祖父にあたる保光は、紀伝道出身の学者にふさわしい式部大輔の経験があり、蔵人頭も経験している。この学識ある一族のもとで行成は教養を身に付けていったと推測される。

天延二(九七四)年行成が三歳の時、父義孝が二十一歳という若さで亡くなったため、祖父である伊尹の養子となり、天元五(九八二)年二月二十五日、十一歳で元服する。永祚元(九八九)年源泰清女と結婚。長徳元(九九五)年二十四歳で蔵人頭に任官し、長徳二(九九六)年権左中弁、長徳三(九九七)年右大弁を経て、長保三(一〇〇一)年に三十歳で参議となる。能書家としても名を馳せ、小野道風・藤原佐理とともに三蹟と称された。後、行成の書は「権

蹟」と言われ、代々世尊寺流として引き継がれることになる。寛仁二(一〇一八)年、行成は道長六男長家を婿に迎え、翌年大宰権帥を兼任。更に寛仁四(一〇二〇)年、権大納言に昇進する。行成の日記『権記』には、政務に追われて多忙な日々を過ごしている行成の姿が伺える。後、万寿四(一〇二七)年十二月四日、五十六歳で亡くなった。

二 『大鏡』における藤原行成

『大鏡』において行成は数多くの逸話が載せられている。それは、蔵人頭に任官する話・和歌が不得手な話・天皇に趣向を凝らした独楽や扇を贈る話・高陽院での秀句の話等であるが、以下、それぞれの逸話を他の史料・作品と比較しながら検討してみたい。

①この侍従大納言殿こそ、備後介とてまだ地下におはせし時、蔵人頭になりたまへる、例いと珍らしき事よな。そのころは、源民部卿殿は職事に

年次	西暦	年齢	事項	位階
天禄三	九七二	一	十一月、祖父：伊尹没	
天延二	九七四	三	九月、父：義孝没	
三	九七五	四	四月、伯母：冷泉女御懷子 (花山母) 没	
永観二	九八四	一三		従五位下
寛和二	九八六	一五	六月、叔父：義懷出家	

ておはしますに、上達部になりたまふべければ、一条院、『この次には、また誰かなるべき』と問はせたまひければ、『行成なむ、まかりなるべき人にさぶらふ』と奏せさせたまひけるを、『地下の者はいかがあるべからむ』とのたまはせければ、『いとやむ』ことなきものにさぶらふ。『中略』と申させたまひければ、道理の事とは言ひながら、なりたまひにしぞかし。
(伊尹伝)

『大鏡』には、行成は地下人だったが源俊賢の推挙によって一躍蔵人頭となることができたのである。しかし、行成は『公卿補任』によると備後権介となる以前に昇殿をしている。
寛和三年正月七日 従五位上。
永延元年九月 昇殿。
永祚二年正月二十九日 備後権介。
正暦二年正月七日 正五位下。
正暦四年正月九日 従四位下。 — 昇殿。
長徳元年八月二十九日 蔵人頭。
行成の日記『権記』にも、正暦四年正月十五日の条に
十五日、甲辰、自宇治到三条、自先頭辨許被示送被聴還昇之由と記されており、蔵人頭源扶義のもとから還昇が通達されている。従って、『大鏡』の「備後介とてまだ地下におはせし時」は矛盾している。何故、『大鏡』の「備後介とてまだ地下におはせし時」は矛盾している。何故、『大鏡』作者は昇殿を許されていた行成を地下人としたのだろうか。
確かに、行成が蔵人頭に任官するに当たって強力な後見人となるべき人物が存在しなかったのは事実である。蔵人頭に任官するまでの行成について見

ておはしますに、上達部になりたまふべければ、一条院、『この次には、また誰かなるべき』と問はせたまひければ、『行成なむ、まかりなるべき人にさぶらふ』と奏せさせたまひけるを、『地下の者はいかがあるべからむ』とのたまはせければ、『いとやむ』ことなきものにさぶらふ。『中略』と申させたまひければ、道理の事とは言ひながら、なりたまひにしぞかし。
(伊尹伝)

『大鏡』には、行成は地下人だったが源俊賢の推挙によって一躍蔵人頭となることができたのである。しかし、行成は『公卿補任』によると備後権介となる以前に昇殿をしている。
寛和三年正月七日 従五位上。
永延元年九月 昇殿。
永祚二年正月二十九日 備後権介。
正暦二年正月七日 正五位下。
正暦四年正月九日 従四位下。 — 昇殿。
長徳元年八月二十九日 蔵人頭。
行成の日記『権記』にも、正暦四年正月十五日の条に
十五日、甲辰、自宇治到三条、自先頭辨許被示送被聴還昇之由と記されており、蔵人頭源扶義のもとから還昇が通達されている。従って、『大鏡』の「備後介とてまだ地下におはせし時」は矛盾している。何故、『大鏡』作者は昇殿を許されていた行成を地下人としたのだろうか。
確かに、行成が蔵人頭に任官するに当たって強力な後見人となるべき人物が存在しなかったのは事実である。蔵人頭に任官するまでの行成について見

ておはしますに、上達部になりたまふべければ、一条院、『この次には、また誰かなるべき』と問はせたまひければ、『行成なむ、まかりなるべき人にさぶらふ』と奏せさせたまひけるを、『地下の者はいかがあるべからむ』とのたまはせければ、『いとやむ』ことなきものにさぶらふ。『中略』と申させたまひければ、道理の事とは言ひながら、なりたまひにしぞかし。
(伊尹伝)

寛和三 正暦二 四 長徳元	九八七 九九一 九九三 九九五	一六 二〇 二二 二四	正月、母：保光女没 五月、外祖父：保光没 八月二十九日、行成蔵人頭に補せらる	従五位上 正五位下 従四位下
------------------------	--------------------------	----------------------	--	----------------------

〔注2〕

行成は蔵人頭に任官するまでに、両親・祖父・国母であった伯母を亡くし、唯一生存している叔父も出家する。そのため一見不遇であるようだが、実は着実に位を上げることがわかる。

そこで、『二条殿の御族は、いかなる事にか、御命短くぞおはしますめる』(伊尹伝)とある部分に注目したい。これは伊尹一族が短命であることを述べているのであるが、『尊卑分脈』によると伊尹は四十九歳・拳賢は二十二歳・義孝は二十一歳・義懷は五十二歳・懷子は三十一歳・行成は五十六歳で亡くなっている。早世したのは拳賢・義孝・懷子であり、伊尹一族が短命であるとは言い難い。

「短命一族」というのは同時に繁栄しない一族を意味する。そのような中に地下人として行成をおき不遇であったことを伺わせ、更に地下人から蔵人頭へと極端に昇進させることによって、行成が幸運の持ち主であることを強調しているであろう。

②この大納言殿、よろづに整ひたまへるに、和歌の方や少し後れたまへりけむ。殿上に歌論議といふ事出で来て、その道の人々、『いかか問答すべき』など、歌の学問よりほかの事とも無きに、この大納言殿は、物ものたまはざりければ、『いかなる事ぞ』とて、なにがしの殿の、『難波津に咲くやこの花冬籠もり』いかに』ときこえさせたまひければ、とばかり物ものたまはで、いみじうおぼし案ずるさまにもてなして、『え知らず』と答へさせたまへりけるに、人人笑ひて、事醒め侍りにけり。(伊尹伝)

『大鏡』(伊尹伝)には、行成が和歌に関しては劣っており、『難波津に咲くやこの花、冬ごもり』はどうかと聞かれて、「わからない」と返答したという逸話がある。

「難波津に咲くやこの花、冬ごもり」は、『古今集』(仮名序)にある、そへうた、おほささぎのみかどをそへたてまつれるうた、

なにはづにさくやこの花ふゆごもりいまははるべとさくやこのはなといへるなるべし。

を典拠としているのだが、同じく(仮名序)に

なにはづのうたはみかどのおほむはじめなり おほささぎのみかどのなにはづ

にてみこときえける時、東宮をたがひにゆづりてくらぬにつきたまはで三とせになり

ければ、王仁といふ人のいぶかり思ひてよみてたてまつりけるうたなり、(中略)

このふたうたはうたのちちははのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

とあり、手習いの始めに用いられた和歌であったことがわかる。

また、能筆家であった行成は数多くの書写を依頼され、『御堂関白記』(寛仁二年十月二十二日条)には上東門第行幸に際して彰子より行成筆『古今集』二帙が送られた記事が見られる。

次大后御送物、箏御琴・侍從中納言書古今和歌二帙

〔御堂関白記〕寛仁二年十月二十二日条

以上のことから、貴族の常識とも言うべき『古今集』を、中でもごく初歩的な「難波津」の歌を行成が知らなかったということはある得ず、『大鏡』のこの逸話は虚構であるといえよう。

ただ、行成は和歌等の風流事を好まなかった様で、『枕草子』(四七段)には、行成は「いみじう見え聞えて、をかしき筋など立てたる事はなう、ただありなるやうなるを」と格別風流を気どらない人物とされ、このような行成に対して若い女房達は「この君こそうたて見えにくけれ。こと人のやうに歌うたひ興じなどもせず、けすさまじなどそしる。」と非難している。同(二七段)には、行成自身も「まろなどに、さる事言はむ(歌を詠む)人、かへりて無心ならむかし」と断言している。また、時代は下るが『撰集抄』(巻八第一八)には「さくらがり雨はふり来ぬおなじくは濡るとも花の陰にくらさん」と雨に濡れながら詠んだ藤原実方を、人々は興あることと思つたが、行成は「歌はおもしろし。実方は痴なり」と言つた逸話がある。

では、和歌を好まなかった行成は実際に歌才が劣っていたのだろうか。行

成の詠歌を見ると次のようになる。

大納言行成

おくれじとつねのみゆきはいそぎしをけぶりにそはぬたびのかなしき

〔後拾遺集〕第十哀傷 五四二

行成の和歌は、この『後拾遺集』(五四二)を始めとして、『新勅撰集』(五八二)・『続古今集』(二五六、一四〇四)・『玉葉集』(一〇三九、二六四五)・『風雅集』(二〇五二)・『新千載集』(二二〇五)・『新拾遺集』(七一四)に収められており、勅撰集に全九首入集している。

これ以外にも、

逢坂は人越えやすき閑なれば鳥鳴かぬにもあけて待つとか

〔枕草子〕一三〇段 一九

去年の今日今宵の月を見しをりにかからむものと思ひかけや

〔栄花物語〕卷第十ひかげのかづら 八七

めづらしき今日のまるとるは君がため千代に八千代にただかくしこそ

〔栄花物語〕卷第二十御賀二四六

壬戌、早朝差若雄丸、送書状於少将許、其詞□□(云々)

世中^平如何為猿、思管起臥程^尔明昏^須假名、(後略)

「世の中をいかにせましと思ひつつ起臥すほどにあけくらすかな」

〔権記〕長保二年十二月十九日条

等が挙げられる。

行成は、一条朝を代表する賢臣として源俊賢・藤原斉信・藤原公任らと共に四納言と称された。この四人其々の勅撰集入集歌数を見ると、当代随一の文化人である公任は『拾遺集』以下、百首もの和歌が入集されている。しかし、斉信の和歌は『栄花物語』に六首見られるものの、勅撰集入集歌数は『後拾遺集』以下全六首^{〔注3〕}であり行成の九首を下回っている。俊賢の和歌に至っては『栄花物語』に三首収められているが、勅撰集には一例も入集されていない。また、北村章氏^{〔注4〕}は、

行成の歌会出席は、『権記』『御堂関白記』『小右記』によると、長保年間(十二回)、寛弘年間(十三回)、長和年間(九回)、寛仁・治安年間に各一回見られる。

と指摘されている。これによると数多くの歌会に出席している行成の姿を窺い知ることができる。

以上、行成詠歌は比較的多く見られ、格別に不得手であったとは言い難い。行成に関しては、前に挙げた『枕草子』『撰集抄』の他に『江談抄』や『古事談』等の作品に多くの逸話が載せられているが、この和歌の話は『大鏡』のみにしか見出せない。歌道に暗い行成を強調するために『大鏡』作者は『古今集』の「難波津に咲くやこの花」の話を作りあげたといえよう。

③少し到らぬ事にも、御魂の深くおはして、らうらうじうしなしたまひける御根性にて、帝幼くおはしまして、人々に、『遊び物ども参らせよ』と仰せられければ、さまざま黄金・銀など心を尽くして、『いかなる事をがな』と、風流をし出でて持て参り合ひたるに、この殿は、こまつぶりに村濃の緒付けて献りたまへりければ、く中略くいみじう興せさせたまひて、これをのみ常に御覧じ遊ばせたまへば、異物どもは籠められにけり。また、殿上人、扇どもして参らするに、こと人々は、骨に蒔絵をし、或るは金・銀・沈・紫檀の骨になむ、筋を入れ、彫物をし、えも言はぬ紙どもに、人のなべて知らぬ歌や詩や、また六十余国の歌枕に名挙がりたる所々などを書きつつ、人々参らするに、例の、この殿は、骨の漆ばかりをかしげに塗りて、黄なる唐紙の、下絵灰かにをかしきほどなるに、表の方には、楽府を、うるはしく真に書き、裏には、御筆とどめて草にめでたく書きて献りたまへりければ、打ち返し打ち返し御覧じて、御手箱に入れさせたまうて、いみじき御宝とおぼしたりければ、他扇どもは、ただ御覧じ興ずるばかりにて止みにけり。いづれもいづれも、帝王の御感侍るに増す事やあるべきよな」
〈伊尹伝〉

後一条天皇の玩具に贅を尽くしたものを作る人々に対して、行成は独楽と斑濃の紐を、又、「楽府」の句を表は楷書で、裏は草書で書いた扇を献上する。それを天皇は大変面白く思い、宝物にするという逸話を『大鏡』は載せている。ここに行成の「少し到らぬ事にも、御魂の深くおはして、らうらうじうしなしたまひける御根性にて」(伊尹伝) という様子が伺える。

独楽の話は他の作品には見られないが、扇の話は『十訓抄』(巻十・六十八段)と『古今著聞集』(巻第七・能書第八)に載せられている。『十訓抄』(巻十・六十八段)には

行成道風が跡を継ぎて、めでたき能書なりけり。いまだ殿上人のころ、殿上にて扇合といふことありけるに、人々珠玉を飾り、金銀を磨きて、

「われ劣らじといとなみあへりけり。かの卿は、黒く塗りたる細骨のたけ高きに、黄なる紙貼りて、楽府の要文を、真草うちまぜて、ところどころ書きて出されたりけるを、召して御覧じて、「これこそ、いづれにもすぐれたれ」とて、御文机に置かれける。

とあり、『古今著聞集』(巻第七・能書第八)もほぼ同文である。『十訓抄』(古今著聞集)では扇合であり、「真草に打ちまぜて」記されているのに対し、『大鏡』では天皇への献上品となっており、行成が献上した扇を表は楷書で、裏は草書で書かれている点が異なっている。

『十訓抄』は「行成は道風が跡を継いで、めでたき能書なりけり」で話が始まり、行成の筆跡があまりにも素晴らしいので、彼の扇が天皇のお気に入りとなったという印象が強い。『古今著聞集』も同様に、能書の部に入れられているため、贅を尽くさなかつた行成を描くというよりは、その筆跡の素晴らしさを言わんとしている。しかし、『大鏡』では能筆家である行成の姿は影をひそめ、扇を「表の方には、楽府を、うるはしく真に書き、裏には、御筆とどめて草にめでたく書きて」といった趣向を凝らしたため、天皇は「打ち返し打ち返し御覧じて御手箱に入れさせたまう」ことになったとある。これは、贅を尽くしたものを作る人々の中で行成は独楽に斑濃の紐をつけて献上したという話と同様、行成の着想が豊かであることを強調している。

④いみじき秀句のたまへる人なり。この高陽院殿にて競馬ある日、鼓は、讃岐前司明理ぞ打ちたまひし。く中略く勝つべき方の鼓を悪しう打ち下げて、負けになりければ、その隨身の、やがて馬の上にて、ない腹を立ちて、見返るままに、『あな災ひや。かばかりの事をだに、し損ひたまふよ。斯かれば、「明理・行成」と一雙に言はれたまひしかども、一の大納言にて、いとやむごとくなくてさぶらはせたまふに、腐りたる讃岐前司古受領の、鼓打ちみ打ち損ひて、立ちたうびたるぞかし』と放言したいまつりけるを、大納言殿聞かせたまひて、『明理の濫行に、行成が醜名呼ぶべきにあらず。いと辛い事なり』とて、笑はせたまひければ、人々、『いみじうのたまはせたり』とて、興じ奉りて、そのころの言ひ事にこそし侍しか。
〈伊尹伝〉

高陽院殿で競馬の際に、讃岐前司明理が勝敗の合図の太鼓を間違つて打ってしまったため、勝つべきはずだった方は負けになってしまった。その騎手

が「一時は『明理・行成』と並び称されていたが、そんなことだから行成殿は大納言になっているのに明理殿はしがない受領なのだ」と罵ったところ、行成は「明理の失策を言うのに、行成のつまらない名を呼ぶ必要はあるまい」と言い、人々は面白く思ったという逸話が『大鏡』(伊尹伝)にある。

高陽院殿での競馬は『日本紀略』『小右記』によると万寿元(一〇二四)年九月十九日に行なわれている。

十九日甲辰。天皇行幸関白左大臣高陽院。馬場殿有競馬事。

『日本紀略』後一條 万寿元年九月十九日条

高陽院行幸競馬事儀 十九日、甲辰

『小右記』万寿元年九月十九日条

『栄花物語』(巻第二十三「こまくらべの行幸」)には、

同じ月の十九日、駒競せさせたまふ。日ごろだにありつるを、今日はとりわきめでたし。中略く競馬十八番なり。なまよろしきをりのだに、乗人も馬もいみじうどみてとみにやは出づる、馬の心地も、いといみじう世にめでたしと思ひて、ともすれば出でてはひき入りひき入りするほど、いとみじう心もとなく見えたり。さてのみあるほども久しければ、「やや」とたびたび仰せらるれば、出で初めて、たびたびになりて、左右かたみに勝負するほどの乱声の音もはしたげなるまでをかし。勝負の乗人の被け物のほどなど、方わきいどみたり。

と、この競馬の様子が詳細に記されている。

『大鏡』(伊尹伝)の「明理の濫行に、行成が醜名呼ぶべきにあらず。」という行成の秀句について、松村博司氏^[注]は

『江次第』(臨時競馬事の条)に、

故長経朝臣打競馬鼓、頗有偏頗。是国負畢。是国来鼓下、放言長経曰、君心操如此、仍不被昇進也、明理・行成者、当初殿上一双也、一人者、大納言在殿上、一人者、在地下打鼓。有人曰、何依罵長経、喚公卿名哉。とあるが、二、三同じことばを使っている所から見て、種は同じであろう。恐らく大鏡は行成の秀句をおもしろくするために、長経を明理に変更したものであろう。

と指摘されている。『大鏡』作者は行成の機知に富んだ様子を強調しているのである。

『大鏡』における藤原行成は、運が良く、和歌は不得意であるが、着想が

豊かで機知に富んでいる人物とされている。そこには、和歌を嗜み、書に秀でた行成の姿はなく、処世上の才覚ばかりが強調されている。ここでも意図的に描き分けている『大鏡』作者の姿を見て取ることができるのである。

[注]

1 拙稿『大鏡』の学芸人―その描写方法―(一)藤原良房

〔有明工業高等専門学校紀要〕第五十三号 二〇一八年一月

拙稿『大鏡』の学芸人―その描写方法―(二)藤原実頼

〔大分工業高等専門学校紀要〕第五十五号 二〇二〇年十一月

2 黒板伸夫『藤原行成』(吉川弘文館 一九九四年三月)をもとに作成。

3 斉信の和歌は、勅撰集には『後拾遺集』(一一三三)・『千載集』(九一二)・九六〇)・『新古今集』(一二二八)・『新拾遺集』(二〇、五四二)の全

六首入集。

4 北村章『藤原行成「和歌の方やすこし後れたま」ひし考』

〔日本文学論集〕第一号 一九七七年二月

5 松村博司『大鏡』(岩波日本古典文学大系 四六二頁・補注四九)。

※原文引用のテキストは以下の通り。

・『大鏡』：『日本古典集成』(新潮社)

・『栄花物語』『枕草子』『十訓抄』：『新編日本古典文学全集』(小学館)

・『古今和歌集』『後拾遺和歌集』：『新編国歌大観』(角川書店)

〔本稿中に記している和歌番号は全て「新編国歌大観」番号とする。〕

・『撰集抄』：『岩波文庫』(岩波書店)

・『御堂関白記』『小右記』：『大日本古記録』(岩波書店)

・『権記』：『史料纂集』(統群書類従完成会)

・『日本紀略』：『新訂増補 国史大系』(吉川弘文館)

※人物略歴については、「国史大辞典」(吉川弘文館)・「日本古典文学大辞典」
(岩波書店)・「平安時代史事典」(角川書店)・「史料綜覧」(東京大学出版会)
を参照。

(2022. 9. 30受付)